俳句がもたらした影響

古田　嘉彦

　『世界俳句2020　Ｎｏ．16』の俳論５篇を読み、改めて俳句が世界文学に及ぼしたものについて考えた。

　ヴィハル・ユディットの「ロシアとハンガリー俳句の特徴」、岩脇リーベル豊美の「ドイツ哲学と俳句」はそれぞれの国において俳句がどのように生きているかを知ることができた。ロン・リデルの「なぜ、俳句を書くのか」は筆者の個人的な俳句との関わりを通して俳句への賛美が書かれている。いずれも読みごたえのあるテキストであるが、私は今回自分の問題意識との関係で、夏石番矢の「世界俳句の二十年についての考察」と、エリック・セランドの「アメリカ現代詩への俳句の影響」について少し触れたい。

　「世界俳句の二十年についての考察」について言うと、その主要な論旨からは離れてしまうのだが、その中で夏石がアレクサンドラ・イヴォイロワの次の作品を引用し、この短い作品の広さ、深さを指摘していることに刺激を受けた。

Pain.

In it

the infinity

痛み／そのなかに／無限

　「・・・このような短さは、沈黙に隣接している。沈黙は、人間の知恵をしのいで、果てしなく、限りなく、そして豊かである。だから、俳句は最も本質的な短詩なのである。」と夏石は論じる。このわずかな語が広大な真実を表現するということこそが俳句が多くの人を魅了する理由であり、それは江戸時代俳句（発句）に多くの人が夢中になりはじめたその起源からそうだったのではないかと私は思うのだ。この短さの力こそが俳句が世界文学に与えたインパクトの最も重要な要素ではないだろうか。

咳をしてもひとり

　尾崎放哉のこの作品は九音しか無いが、静かさの中で一人でいることが迫ってくる。国語の教科書にも掲載されるこの作品を、多くの人は俳句（自由律の）として受入れ、感嘆している。種田山頭火は放哉を尊敬し、放哉のような短い句を作ろうとした。

鉄鉢の中へも霰

　音という言葉は無いが、行乞に使う鉄鉢に降りこむ霰の音を感じる。音がする、すなわちまだ鉄鉢には何も入っていないのを想像する。山頭火のこの作品は十一音であるが、今日どのようなお布施があるかどうか分からずに歩く行乞の時が、鮮やかにここにある。

　このような作品を読み何が俳句なのかを考えるとき、シラブルカウントは従属的な問題であるのがよく分かると思うのだ。（定型を排除する積りは無いが。）

　モノクロの写真については一般的に言えることであるが、モノクロには独特の力がある。マリオ・ジャコメッリの「わたしにはこの顔を撫でてくれる手がない」を見るとき、裾を翻して旋回する修道士の黒い姿が心に焼き付けられる。おそらくそれがカラーであったらこの力は決して持ち得なかっただろう。色の素材を限定された白と黒だけにすることによって、黒の力が増し、刺激が深くなる。それは作品の中に含まれる語が少ないほど、その語の力、刺激の広がりが拡張するのと似ている。

　そのようなことは音楽でも言える。シベリウスの交響曲第２番第１楽章は田園的な響きで始まるが、42小節目でオーケストラはふと音を止める。そして第１バイオリンだけが何かを宣言するような旋律を弾き続ける。それはやはり沈黙、フィンランドの森と水の静けさに隣接している。第４番の交響曲の第１楽章でも59小節あたりからひとつの旋律（数小節はふたつ）以外の楽器は沈黙し、６９小節からは第１と第２のバイオリンだけが一つの旋律を強奏する。それは実に強烈な神秘的な響きになっている。

　それらに共通するのは引いていくことにより残されたものの浸透圧が高まるということである。

　次いで注目したのは「アメリカ現代詩への俳句の影響」であるが、ここでエリック・セランドは俳句という詩形ではなく俳句の性格「客観的であること、単純さ、直接性、そして表現を削りきること」が、その主流にではないもののアメリカ現代詩のある領域に影響を保っていることを指摘している。作品としては長い詩であっても、その中で何かを語っていくのでなく、素材の表現を削りきって提示するということに魅せられた詩人達がいるのだ。俳句という詩形の状況にのみとらわれずに詩人の精神に何が生きているかに注目するとき、俳句の影響の幅広さが見えてくる。

「怪物であるようないくつもの線が存在する・・・。」（ドラクロワ）

削ることによって一語が怪物のようになる可能性が開かれると私は考えている。

今回これらの評論により世界文学への俳句の影響について改めて考える機会を得たことに感謝したい。